

長野医療生協 長野中央病院 透析室 ○高木なつ子 山本秀子

吉岡智史 中条善則 透析室スタッフ

【はじめに】

透析中に災害が起きた場合、透析機器からの離脱が必要になる。当院の透析回路は災害時道具を使用せず離脱できる回路であるが、透析室として離脱訓練を行った事がなかった。そこで患者様自身の自力での離脱が可能にすること。スタッフが患者様の自力での離脱が可能か否か把握できること。その結果速やかな介助行動につなげること。以上を目的として離脱訓練を行った。その結果から、今後の離脱訓練と災害時のスタッフの役割分担について検討したので報告する。

【対象】

当院で外来維持透析を受けている患者様 81 名 (67.88±9.11 歳) 中、自己離脱が可能と考えられる患者様 66 名 (67.46±9.69 歳) 離脱訓練に参加したスタッフ (看護師 10 名、臨床工学技士 5 名)

【研究方法】

- 1) 訓練開始前に訓練の目的、期間、方法について患者さまにお知らせする。
- 2) 訓練開始前に、スタッフ間でトリアージについて学習し、訓練の目的、期間、対象、拒否した場合の対応について統一をはかる。
- 3) 訓練マニュアルを作成し、統一した指導を行う。
- 4) 評価表を作成し、一貫した評価が行えるようにする。
- 5) 返血時、返血にあたったスタッフが、離脱手技の指導訓練を実施し評価表に基づき評価する。
- 6) 期間は1週間とし、1人の患者様に2、3回行なう。
- 7) 訓練終了後、患者様、スタッフにアンケート調査を行なう。

【研究期間】

2003年8月1日～8月31日

【結果及び考察】

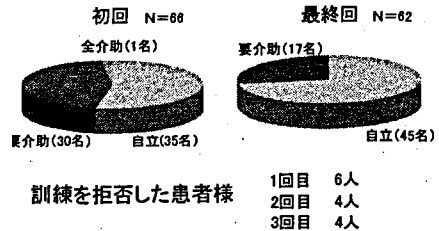
訓練に参加した患者様は66名であった。そのうち1回目に訓練を拒否した患者様は6名だった。

高木なつ子 長野医療生協長野中央病院 透析室
〒380-0814 長野市西鶴賀 1570 026-234-3211(内線 1420)

しかし、最終回までには、全員が訓練をおこなった。1回目の訓練は実施したが2回目3回目の訓練を拒否した患者様はそれぞれ4名いた。全体的な手技の評価としては「自立」が初回35名、「最終回」では45名であった。「要介助」は初回が30名であり、「最終回」では17名であった。「初回」全介助であった患者様は、「最終回」要介助となった。(図1)

回を重ねるごとに離脱手技は向上している。また、訓練を拒否した患者様も最終的には他患者様の訓練が進んでいく中で訓練に参加するようになったことから、訓練を重ねることは技術の向上のみでなく緊急離脱に関する患者様の意識変革につながったと考えられる。

図1 スタッフの患者様に対する評価

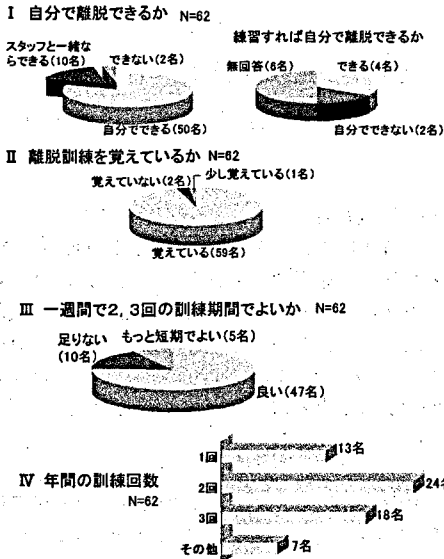


患者様アンケートより「実際に災害が起きた場合離脱手技は自分でできる」とする患者様は50名であった。さらに、「スタッフと一緒にできる」と「できない」を合わせた12名の内、「練習すればできる」とする患者様が4名いたことから、練習を重ねていく中で技術の向上と共に「自分でできる」という意識の向上は可能である。「離脱手技を覚えているか」については「覚えている」が59名と高率であった。これは訓練からアンケートまで一週間と短期間であったことも影響している。

訓練期間については「ちょうどいい」が47名と最も多かった。一年間の訓練回数については「2回」が24名と最も多かった。3回、6回、12回、多ければ多いほど良いという声もあった。

このことから訓練を行ったほとんどが今後も訓練を必要と考えていることがわかった。(図2)

図2 患者様アンケート



スタッフのアンケートより「患者様が自力で離脱可能か区別できる」について「できる」が7名「できない」が8名であった。表示があれば可能という意見もあった。訓練の度に患者様のネームに表示していくこととした。離脱手技は全員が覚えていた。緊急時の自分の役割について「わかる」が4名、「わからない」が11名であった。(図3)役割分担について明確化していなかったため、今回透析室内での火災発生時の役割分担について明確化することができた。(表1)

他の災害時の役割分担についてもトリアージを考慮にいれスタッフ全体で学習しながら検討している。

図3 スタッフのアンケート N=15

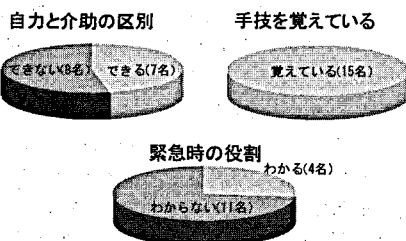


表1

火災時の役割分担表(透析室内の火災発生時)

消火係	発見者及び技士	火元の確認、初期消火
連絡係	Bチームリーダー	昼 ① 0-119通報 ② 事務長室 ○○○番 夜 ① 0-119通報 ② 当直 ○○○番
避難経路	Bチーム技士(昼、夜)	非常ドアロック解除 避難経路の確保、案内 どこから逃げるか大声で叫ぶ エレベーターは使用しない
離脱の指示	室長又は総リーダー 夜はAチームリーダー	患者様に離脱の指示をする
避難誘導	スタッフ	介助患者様の避難 ベット、車椅子は使用しない 毛布にくるんで運ぶ

【今後の課題】

- 1) 回路の工夫、回路の固定方法、ヘッドランプの準備などさらなる環境の整備が必要。
- 2) 訓練の回数を含めた方法の再検討。
- 3) 非常口、避難方法、災害時の対応についての周知徹底。
- 4) 災害時、平常の透析ができない場合を考えたコントロール方法についての、パンフレット作りと患者教育。
- 5) 他の災害時の役割分担。
- 6) 災害に対するスタッフへの教育。

【結論】

- 1) 外来維持透析患者様 66名に緊急離脱訓練を行った。
- 2) 訓練最終回での離脱自立患者様は、45名(68%)であった。
- 3) 自己離脱可能か否か表示することとした。
- 4) 訓練が進むにつれ患者様の緊急離脱に対する手技及び意識の向上がみられた。
- 5) 今後トリアージについて更に学習しながら、訓練方法について検討を重ねる必要がある。
- 6) 透析室内での火災発生時の役割分担とスタッフの意思統一ができた。

【参考、引用文献】

透析室における確実な離脱訓練 前田記念腎研究所日本透析医学会雑誌 2003. 48. 0921
 災害時のリスクマネジメント停電・水害 臨床透析 2002. Vol18. No7
 院外患者患者からの連絡法 臨床透析 2002. Vol18. N07